

津高同窓会報

発行所

〒514-0042 津市新町3丁目1-1

津高等学校
同窓会事務局

TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

会報五十号新たな歴史を



同窓会長 飯田 俊 司 (昭和36年卒)

てきました。各地の総会は例年以上に出席者も多く、盛況でありました。

会員の皆様にはご健勝のこととお喜び申し上げます。平素は同窓会活動に格別のご協力、ご支援を賜り厚くお礼申し上げます。津高同窓会報も発刊五十号を迎え、新たな歴史を刻む第一歩を踏み出しました。

本年の同窓会活動を振り返ってみますと、四月に第三回学年対抗ゴルフコンペ（出席者168名）、東北復興支援旅行（13名）、五月に東京同窓会総会（230名）、八月に本部同窓会総会（163名）、九月に名古屋同窓会総会（140名）、十一月に第二回有造塾（178名）、十一月に大阪同窓会総会と、活発な活動を行っ

てきました。各地の総会は例年以上に出席者も多く、盛況でありました。

さて、私は九月九日から十八日まで旧ユーゴスラビアのスロベニア、クロアチアとチェコで六つの世界遺産巡りをしてきました。うち二つは大鍾乳洞及び十六の湖と無数の滝が織り成す湖群のスケールの大きい自然遺産、他の四つは石の城壁に囲まれた美しい中世都市の文化遺産でした。

旧ユーゴスラビアは連邦制の社会主義国家でありましたが、一九八〇年にチトー大統領の死去により連邦を形成していた国々で独立の気運が高まり、これを阻止しようとするセルビアなどの連邦政府との戦争、或いは民族対立による内紛が各地で勃発、血を血で洗う戦いがあったことは日本のマスコミでも報道され一九九一年から二〇〇六年までの間に六つの国に分裂し、よう

やく落ち着きを取り戻しました。各国はオスマントルコ、ハプスブルク家、ナポレオンのフランス、東フランク王国、ヴェネチア、ハンガリーなどからその時々支配を受けた歴史を有し、民族、宗教などが複雑に絡んでいます。が、民族国家独立を求める国民の願いから激しい戦いになったようで、クロアチアで見た民家のいたるところに残る銃弾の痕に衝撃を受けました。

日本は戦後、平和、自由、豊かさを求めて懸命に努力し、これらを手に入れながら、近年ますます閉塞感が広まっています。

尖閣列島、竹島、北方領土をめぐる外交問題、沖縄の基地、原発とエネルギー、国及び地方の財政赤字、「いじめ」、東日本大震災の復興、南海トラフ大地震への対応、実力以上の円高傾向、デフレの継続などなど難問を数え

ご挨拶	2
水害は人災である	2
私と津中	3
九十四歳の誕生日に	3
『古事記』編纂十三百年を迎えて	4
次世代の津高生に託すもの	5
「自主・自律」そして「芸術」	5
日々の取材を通じて	6
民主主義の礎として	6
東北復興支援旅行	7
有造塾が開催されました	8
副会長就任挨拶	9
津高校進路指導状況	9
平成24年度総会	9
・パーティーを終えて	10
第4回津高同窓会	10
学年対抗ゴルフ大会	10
各地で同窓会開催	10
物故者	11
平成25年度同窓会	12
参加者募集	12



上げたつぎがありません。
日本という国と運命共同体の日本人が解決策を見出していかなければなりません。国内で民族争いも、宗教の対

立もなく、自由で豊かな日本は、旧ユーゴスラビア諸国にはない有利な条件は一杯あるはずです。そんな思いをした旅行でした。

タイトル・書 工 藤 雅 俊 (昭和45年卒)
真 弓 俊 郎 (昭和43年卒)

ご挨拶

学校長 榎本和能



支援を賜っていることに、心より感謝申し上げます。

現在、学校の使命を「高い知性と教養を持ったリーダーの育成」として、生徒の「進路実現」とともに「人間力の向上」を意識した教育を行っています。この方針が、教員の指導を通じて、徐々に生徒や保護者に浸透してきている状況です。

水害は人災である

小倉康彦

(津中昭和22年・津高24年卒)



「水害が災害(天災)」であるという觀念から「事後対策」を述べられました。これでは日本列島は水害で沈没してしまつと、当時、未だ若き六十五歳の血(?)が騒ぎ、総理への直訴のため急遽「水害は人災だ―森は死んでいる」(同年十一月・清文社刊)を上梓し直訴しましたところ、翌十八年の年頭挨拶は「事後対策」から、拙書に記述の「先人の教え」による健全な造林という「事前対策」へと全く逆の改正をして頂きました。

「バスの上への避難」という水害をご記憶でしょうか。平成十六年十月の豊岡大水害です。

その翌年、小泉総理は年頭の挨拶で

拙書での先人の例は、「暴れ天龍」

がったと思います。

今年度より、発展的な学習の機会としての土曜課外の実施や、三年生を対象に放課後の自習の場として図書館を午後七時まで開放するなど、いくつかの新しい取り組みを始めました。このように現在の生徒の状況にに応じて、必要な取り組みを行うという学校文化も生まれつつあります。

自由な校風のなかで「自主・自律」の精神を育むという津高の「不易」を大切にしつつ、できる限りきめ細かい指導を行い、皆様のご期待に添えるような学校づくりに全力を尽くす所存です。

内容「災害↓人災」を実現するため国会議員を一人も知らない私は直訴を実現するための手段として次の作戦を採りました。

小池環境大臣にも拙書及び陳情書的なものをお送りし、更に業務上「水害は人災」だと承知している林野庁長官には、総理と環境大臣にもお願いしたと拙書等をお送りしました。恐らく長官は、総理大臣が環境大臣室へ呼ばれたことでしょう。

今後の政府に同窓会のお力で小池氏等を紹介して「水害は災害にあらずして人災だ」と輪を広げて欲しいのです。三重県の南部は特に水害多発地帯です。「水害は人災だ」という治山学上の技術的根拠は次の通りです。

水害発生の頻度・程度は「浸透能」という物指しで判明するのです。雨の

「ぎいますので、今後とも母校に対する暖かいご支援をお願い申し上げます。



現 津高等学校 上空より

量と森林土壌へ浸入する関係を示す浸透能が物指しになります。即ち、浸透能のうち、まず「浸透」とは、水が地表面から森林土壌へ浸入することを指します。次いで、浸透能とは、森林土壌の単位時間・単位面積当たり吸収できる水の量を指します。

以上の要約、第一に、日本林業を市場経済路線とし、第二に日本中の森林を健全型森林に造成する。その結果、健全型森林の浸透能は、本年七月規模の豪雨でも、水害は、最小限に食い止めることができるでしょう。

(近畿中部総合鑑定所代表取締役)

私と津中

津坂 治 男 (昭和23四修)



玄関の向かいに小じんまりした家があった。県の官舎になっていたが、そこに明治後期、津中校長の弘田正郎とその子で後の作曲家龍太郎が住んでいた。彼と一級下の私の父弘允は常時顔を合わせていた。父は、母も門の側の長屋に貧乏士族の父親と住んでいて、登校する龍太郎の姿をよく見かけている。なお、龍太郎がいた家は母屋とながっていて、幼稚園の頃私は、その娘と弟と三人、十ばかりの部屋を次々襖を開けて探検したりした。立派な鎧を飾った座敷もあった。私の家との間は小さな広場みたいで、正月にはどこからか獅子舞もやってきていた。

ところで、新しい津中学は私が通う新町小学校とは道路を隔てた南にあって、戦時中でも英語の時間を削らないという学業尊重の気概が先生方の間にあったと聞く。印象に残るお一人に、漢文の伊藤先生がいる。同級生のお父さんだったが、津中移転の頃に『谷川士清先生』という本を書かれた。私も母校のそばで学問に励んだ士清に私淑し、昨年『谷川士清と日本魂』という本を出した。鎖国の世に士清らが自国のアイデンティティをどこにもとめたか、それを宣長の場合と比べて論じたのだが…。

中二の夏には、津中も家も空襲で焼け、私は長谷山の向うへ疎開して欠席も増えた。冬に入った乙部のバラックでは空腹に悩まされ、また電気がつくまではカンテラの灯の下での勉強だった。が、事情は少しは安定し、四年の冬休みには微積の特訓も受けている。私は仏文志望だったのだが、家から通えるところということで、前年開校の三重県立医大予科に入り、本科は家計の悪化のため半年余りで退学したが、ここでの日々は以後の人生の支えになった。のち国語の免許を取り、退職後も講師を勤めた。十代に始めた詩や文章は、こちらは無期限でまだ続けている。

明治十三年創設の津中学は、最初藩校有造館の建物を借りて出発したのだが、文政二年有造館開講の初代督学は私の先祖津坂東陽である。生家では座敷の鴨居に自筆の扁額や槍などが飾られ、私も毎日それを見て育ったが、空襲で全焼。資料もあらかた失った父は四十年余り前、東陽のことは私に託して世を去った。退職してからまとめようとしていた私だが、脚の衰えを恐れ、五十を少し過ぎた時点で研究、執筆を開始した。土日は出来るだけそれにおいて、国会図書館では、名を一字違えて保管されていた詩文集を発見したりした。こうして、数年後『津坂東陽伝』

九十四歳の誕生日に

信 藤 節 子 (昭和11年卒)



で水墨画展の開催中で、ひきつづき、国芸会小ホールで猛暑の日々、無事終了しました。

今日こそはと、ペンを取りましたのが、八月三十一日、九十四回目の誕生日。日捲りカレンダーは「おかげさん」で何か嬉しくなりました。平和な時代にヤコブ幼稚園、

パソコン・CD・メール可で、原稿依頼を受けたのは、有楽町の交通会館

附属小学校、津高女に学びました。女学校一年の夏は、水泳部で阿漕の海で、

が完成、東京の櫻楓社から出版された。東陽が唐の詩人杜甫の律詩について論じた『杜律詳解』は戦後吉川幸次郎氏によって中国にも紹介された好著である。

有造館開講からちょうど二百年になるのが二〇一九年。今から七年先だが、私も関係者の一人として出来れば元気でそれを迎えたいと思う。が、しかし今この文章を書かせてもらったことで、先祖東陽や津中先輩の父弘允にも多少の恩返しが出来たと思っている。いや、同窓の諸君にこの拙文を読んでもらえるだけでも幸せである。

(日本文芸家協会会員)

五千米の遠泳、競技にも参加しました。プールなど無い時代で、小野江の川を、一部堰止め、ロープでコースを作り、記録をつくった覚えもあります。短い海の季節の他は、バスケット部で岩尾先生指導の元、コートを走り回っていました。県大会で優勝。県外にも遠征したり、楽しい思い出一杯です。学芸会の時、学年代表で、舞台の上で絵を描き、出来上りを、皆に見ていただいたり、朗読も飯南高女に鈴木先生と一緒しました。良妻賢母教育で卒業後は、花嫁修業。親同志で決めた相手が、津中卒、バレー部でした。

昭和十六年四月、夫に召集令状。大東亜戦争に突入。国策で家族携行とのことで、幼児を連れて、満州国開原に、終戦の詔勅をきいたその時から、敗戦

国民となり、引揚者の苦勞も味わいました。主人は勿論、シベリヤ抑留、片言のロシア語で、重労働を免れた事を自費出版しました。研究職に戻ったのは三十二年で、四十二年から国立に。第二の故郷となりました。津高百十周年記念旅行、スペイン・ポルトガルの旅は、楽しい思い出一杯です。

同窓会出席は、三重桜の席を維持し

素敵に生きる

桐朋通りを曲がり少々奥に入った所に信藤さんのお宅があった。朝顔が塀に添う様に咲いていて初めてお逢いする緊張感を和らげてくれた。部屋に通され、ゆっくり座った信藤さん何てお若くハツラツとしているのか、あたたかさが、仕草からも伝わって来て驚かさ

れた。



趣味はと言つ問いに、水墨画、折り紙、水彩画、お習字、健康体操、等々多才だ。それも八十八才から始めたと言つ。これも目を丸くしてしまつた。六月水墨画の展覧会が銀座であった際、五百枚もの動物を折ったそう

たつての事です。

また趣味のひとつで動物の折紙は、東北災害基金にと思い、水墨画展の際に五百枚ほど折り、来場された方々に買っていたきました。少しはお役にたてたのではと思っています。

朝からお花やお菓子が届き、ひ孫の来訪。夕食は中華料理で「なんて幸せな」と、良い一日を感謝。

信藤節子さん訪問

たくて庭のある家を探し昭和四十二年国立に移住し、研究者だった主人は今年十三回忌を迎えたそう。『しあわせはいつも自分の心がきめる』相田みつをのこの言葉が大好きで、カレンダーがかかっていた。一番辛かった事は、戦後三重の自家に

居た時、手伝いで田んぼに入り蛭にかまれた事、あれはいやつ。一番辛せに感じた事は、今、元気に歩ける事、多くの友達に支えられている事、孫、ひ孫合わせて十三人の家族に守られ、私、本当に今、幸せなのよ」と。

そんな信藤さんの言葉を思い出して、胸が熱くなるのを感じながら自転車走らせた。

◇水墨画 観音像 (広報誌より転載)

『古事記』編纂千三百年を迎えて

三浦 佑之(昭和40年卒)



いつのまにやら『古事記』を研究対象として四十年もの歳月を過ごしてしまつた。

なぜ『古事記』なのかと問われることがあるが、現代文学と同じようにおもしろかったからと言つ以外に返事のしようがない。

その『古事記』が、今年で編纂千三百年を迎えたというのにわかに脚光を浴び、新聞や雑誌はもろろんテレビ番組でも特集が組まれ、市民講座も大賑わい。おかげで私もあちこちでお話をしたり、原稿の依頼を受けたりする。ところが本当のことを言つと、和銅五(七二)年に『古事記』ができたといつのは嘘だというのが私の見解である。三巻から成る『古事記』には、上巻に「序文」があり、それを信じれば今年が千三百年といふことになるのだが、昔から『古事記』には偽書説といふのがあって、かの本居宣長が師と仰いだ賀茂真淵も「序文」は疑わしいといふ考えを持っていた。

現在では、ほとんどの研究者は序文に記されているまに和銅五年に『古事記』は成立したと考えているが、私は、『古事記』の本文は七世紀末までに書かれ、序文は九世紀初頭に『古事記』を権威づけるために書き加えられたとみなしている。そこでその理由を論じる余裕はないので、詳細については拙著『古事記を読みなおす』(ちくま新書)などをお読みいただきたい。

私が、序文は偽書だと言いつながら編纂千三百年に便乗していろいろな発言をしているのはなぜかというところ、変な方向へ『古事記』が拉致されるのを警戒するからである。まるで街頭に立つて高校生が悪の道に引き込まれないように見守る補導員の気分になっている。ご承知の通り、戦前における皇国史観のなかで『古事記』は神典として扱われ、近代天皇制を支える精神的な支柱として存在した。その反動として戦後の『古事記』は、反動的な書物として唾棄され、教育の場からも完全に排除された。しかし考えてみれば、戦前の扱いも戦後の扱いも、『古事記』にとっては不当な扱いだといふ言いがたいと私は思う。なぜなら、『古事記』という作品には何の罪もないからである。悪いのは、意図的あるいは

未熟ゆえに『古事記』をねじ曲げた戦前の為政者や研究者たちであり、その反動として『古事記』を無視し排除した戦後文化人や教育者であった。その不幸な時期をくぐり抜け、今ようやく『古事記』という作品は、私たちの先祖が遺してくれた貴重な古典として読めるようになった。

『古事記』の神話や天皇たちにまつわる伝承を冷静に読んでみる。そこに描かれているのは、国家から距離を置いて歴史をみようとする立場であり、支配者となった者たちを称賛するのではなく、戦いに敗れ殺されていった者たちに対する共感や鎮魂の思いに満ちている。

高天の原から降りてきた神に地上を奪われた出雲の神々の物語が、なぜ『古事記』神話の中心を占めているのか。父である天皇と対立し能煩野の地で落命するヤマトケル(倭建命)を、天皇に抗つて命を落とすメドリ(女鳥王)やマヨワ(目弱王)を、なぜ『古事記』はあれほど感動的に語ろうとするのか。そこに『古事記』の真実があり、それは、父天皇の言うまに戦いを続ける良い子のヤマトケル(日本武尊)を描く国家の正史『日本書紀』との本質的な違いである。なにせ、『古事記』には「日本」という語が一度も出てこないのだから。これを機会に、ぜひ『古事記』を読んで物語のたのしさを味わっていただきたい。(立正大学教授)

次世代の津高生に托すもの

丸岡 啓 二 (昭和47年卒)



最近の日本は内向き指向になってきているという言葉をよく耳にする。京都大学でも、私の学生時と較べ、留学

したい学生が本当に減ってしまった。隣国である中国や韓国の若者が怒濤のごとく海外留学を目指している現状と雲泥の差がある。この先、日本は国際社会で太刀打ちしていけるのだろうか？

私は松阪市で生まれ育ち、津高校に越境入学した。三重県下で唯一自由な服装で通学できるという校風に憧れたせいである。大学は、津高校のように自由な校風を謳つ京都大学に決めていた。しかしながら明確な指針を持って大学に入った訳でもなかったため、入学後大学で自分が具体的に何をすべきかとても悩んでしまった。幸い大学では自由な時間が多くあったため、著名人の伝記を読む等、人生の意味を探し求めた。そのひとつが、「人はそれぞれ天賦の才能があり、それを自らの努力で大いに伸ばし世のために還元すること」であった。津高校に入学された皆

さんは、いろんな面で才能を持っていると思う。勿論、それは皆さんの努力で得られた部分もあるが、生まれながらの才能も大きいように思う。そういった天賦の才能を無駄に埋もれさせることなく大いに努力してその才能を伸ばし、日本の将来のために尽すべきであらう。

大学二年生の時、「外国に行くならできるだけ若い時の方が良い」という忠告を受けて、大学院から米国へ留学した。それまで外国に行ったことの無い私にとって、米国は想像の世界でし

「自主・自律」そして「芸術」

谷



私は現在音楽家として音楽を生業とし、演奏や後進の指導に携わっています。私が音楽を志したのは、高校に入ってからのことです。音楽大学の受験は

なかった。しかし、実際に米国に行ってみると、自分の世界が一挙に広がった。日本と較べて文化や考え方、人生観などあまりに違つたため最初は戸惑いもあったが、いろんな面で人間の幅を広げてくれた点は金銭に替え難い。また、若い時はややもすると異国文化に染まりやすいため、自分の座標軸を持つことがとても重要だと気づいた。その後、名古屋大学で職を得て、北海道大学を経て、ほぼ20年ぶりに京都大学に戻って来た。職業柄、これまで講演等で百回以上海外に出かけているが、「世界の中の日本」を客観的に観るの

におおいに役立っている。さて話を元に戻すと、天然資源や食料に恵まれない日本では唯一、人的資源を活用するしか術がなく、今後も国

篤 (昭和54年卒)

実技試験が重視され、一般教科はほとんど資格試験程度の重みしかなく、進路を決めてからは、学校の勉強は私にとつてあまり重要な意味を持たなくなりました。同級生が勉学に励んでいるなか、自分だけが異なった存在であるような気分さえ覚えていました。それでも学校生活は楽しく、疎外感を感じることはありませんでした。校内試験の成績が良くないときでも、私の状況

民一人当りのレベル、それも知的レベルを高めなければ世界で生き残れないことは容易に推察できよう。そのためには教育が重要なことは論をまたない。「教育は国家百年の大計」と言われるが、日本ではなおさうである。最近巷では少子化の影響を受けて大学全入時代になったと言われているが、キャリアアップの時代が終焉し、周辺諸国から厳しい追い上げの時代に突入してしまった日本では、今後、否が応でもイノベーションを生み出していかねばならず、いわゆる知恵の時代に移りつつある。右肩上がりの時代と異なり、格差社会の到来で若い世代にとっては受難の時代かもしれない。しかしながら、次世代を担う若者にとつてはこのようなハンディや自己責任を負わされ

を理解して下さり、励まして下さる先生もいらっしやいました。今思えば、「自主・自律」の校風があったからなのだと思います。

この「自主・自律」の精神は、音楽のみならず芸術においてとても重要です。芸術は自らの精神と向かい合つことから始まると、私は感じています。そしてそこから何かを紡ぎ出し、高め、磨き、他者と共有したいと心から願うとき、真の芸術が生まれます。そのためには自分が何者であるのかを見据え、自らの意思と規範に従って行動することが大切なのです。つまり「自主・自律」です。そしてその上に立って、他

るものの、やりがいのある時代の到来と言えそうである。なでしこジャパンを見ても判るように、指導者の明確な方向性と選手の活躍できる環境を整えられれば、日本の若者は充分やれるのである。私の研究室にいる欧米の留学生や博士研究員は、大学や大学院生時の夏休み期間を利用して、海外に短期留学していることが多い。広い世界で自分の視野を広げ、国際的な感覚を磨くためにも、短期間でも良いから若い人は積極的に海外経験を積むべきである。英語能力なんてどうでもよいのである。活力ある日本社会を創るため、若い世代の奮起に期待したい。

(京都大学理学研究科教授)

者との深い共感を求めてゆくことが芸術の本質だと思うのです。

私達は普段言葉でコミュニケーションを図りますが、自分の本当に大切な気持ち言葉では表現しきれません。「なぜ嬉しいか」という感情の理由は言葉で言えますが、「どのように嬉しいか」ということは言葉では表現しきれません。言葉は概念であり、個々の気持ちはそれぞれに異なり、どれ一つとして同じではありません。その自分の唯一の気持ちを他者と分かち合いたいと思ふ表現こそが芸術なのです。つまり芸術は言葉にならないその人固有の精神の有り様を伝えるのです。

この芸術によって果たされる深い精神的コミュニケーションは、近年増々重要なものになってきていると思います。何故なら人と人との結びつきが希薄になってきているからです。私達が暮らすこの社会は、貨幣に象徴される経済効率が大変重要なものとされ、効率を上げるために規制緩和、自由競争の原理が持ち込まれました。そこでは他者は競争相手ですから、信じるよりは疑う存在となります。その結果、人

同士の結びつきは益々希薄なものとなってゆきます。それと引き換えに得られたものは経済的繁栄です。しかし、お金で人の精神は本当に満たされるのでしょうか。私はお金で幸福は買えないと思います。何故なら人は一人では生きていけない存在だからです。無人島で生涯を終える絶対的孤独な暮らしを想像すれば、自ずと納得出来るでしょう。誰かと繋がっていると感じられた時、孤独は癒され、生きる気力が湧いてき

ます。この人と人との繋がり、それも深い心の結びつきこそが、精神を満たし、幸福を与えてくれるものなのだと思います。

今こそ、暮しに芸術が必要なのです。優れた芸術には、民族や言語、国境を超え、何かを伝え共感し合う力があります。芸術こそが資本主義経済社会を補完し、人を幸福へ導く指標となるのです。

(東京芸術大学講師)

がります。

さて、日々の取材の中で毎回苦労するのが、取材相手に年齢を尋ねることです。たいていの方が「え？年言つの？」「ぶふふ…」など、何か一拍置かれま

られますが、まれに全く躊躇せず教えて下さる場合があります。その中に忘れられない言葉があります。たまたま私と同じ年齢の女性でしたが、あまりにあっさり言っただけで、助かります」と言つと、その方は「今まで生きてきた年齢なんだから、堂々と言えないとね」と笑い、それはとても素敵な笑顔でした。

日々の取材を通じて

川村 裕子(昭和59年卒)



だしいものですが、多くの方と出会える体験は貴重です。小学生の田植え、長年夢見た絵画の初個展、世代を超えてつなぐ伝統行事など実にさまざまあり、九年目ともなると、「前も取材してもらったね」と、顔なじみになる方も少なくありません。この原稿を書くきっかけも、取材で親しくお話しするようになった方が津高の先輩だったことが縁です。

私は、昭和59年卒業で、もつと四十七歳になります。大学卒業後地元に戻り、就職、結婚退職、二児の母となりました。次男が小学生になった年に地元の伊勢新聞社にご縁があって地域面の記事を書くようになり、「石の上にも三年」を目標にしていたはずが、おばちゃん記者歴は現在九年目を迎えています。

日々取材をし、その後数時間で記事に仕上げる作業は時間に追われる慌た

私が取材を担当する津市は、平成の大合併で旧津・久居・一志・白山・美杉・香良洲・安濃・芸濃・美里・河芸の周辺十市町村が1つになりました。取材をしていて感じるのは、そこに住まう方の地域への愛着です。中でも素晴らしいのは、十市域のすべてに名所や

民主主義の礎として

吉川 衛(平成4年卒)



旧跡を案内するボランティアガイドの会が実に十三もあることで、会員の皆さんは熱心に実地研修を重ねて地域案内の技術を磨いています。観光スポットの少ない津の街で、市域すべてにガイド会があるのは全国でも例がないところで、地域の歴史や先人の功績を顕彰し伝えていく精神には、いつも頭が下

がります。

さて、日々の取材の中で毎回苦労するのが、取材相手に年齢を尋ねることです。たいていの方が「え？年言つの？」「ぶふふ…」など、何か一拍置かれま

られますが、まれに全く躊躇せず教えて下さる場合があります。その中に忘れられない言葉があります。たまたま私と同じ年齢の女性でしたが、あまりにあっさり言っただけで、助かります」と言つと、その方は「今まで生きてきた年齢なんだから、堂々と言えないとね」と笑い、それはとても素敵な笑顔でした。

私が津高を卒業してから、はや二十二年が経ちました。すでに、故郷で暮ら

した年月よりも、離れてからの方が長くなってしまいました。父母が残る実家にも年に一回帰るかどつかという状況ですが、故郷のことは気にかかり、いつも新聞やテレビで三重のニュースはないかと探しています。私は、津高在学時から、報道機関で働いてみたいという思いを抱いていたこともあって

大学卒業後、NHKの記者となりました。鳥取放送局で五年勤務したのち、今年夏に福岡放送局に異動するまで、十一年間、政治部に在籍し、東京・永田町で、政治取材を続けてきました。「夜討ち朝駆け」という言葉通り、朝から晩まで、「番記者」として、有力政治家を追いかけて、テレビに出演して解説をしたり、選挙で「当確」を打ったりと、様々な仕事を経験してきました。この間、首相官邸詰めが長かった私は、首相の交代に幾度となく立ち会いました。また、東日本大震災の際

には、「官房長官番」として、昼夜なく開かれる記者会見や、政府高官への取材を通じて、原発事故への対応や被災者支援策などの報道にあたることになりました。記者の仕事は、なかなか力力的には厳しいものがありますが、大変やりがいがあると感じています。しかし、昨今、新聞・テレビの政治報道に対しては、永田町の中の「ゴタゴタ」しか報じていないとか、ポピュリズムを煽っているだけだなど、さまざまな批判が寄せられています。また、インターネットの普及などで、個人が盛んに情報を発信し、既存のメディアの地盤沈下も指摘されています。政治報道に携わってきた者として、批判は真摯に受け止めていますし、マスメディアを取り巻く環境が厳しさを増していることは、身にしみて感じています。それでも、記者が果たすべき役割は、決して小さくなることはないし確信しています。

それは、日本が大きな転換期を迎えている今、情報の重要性が、いっそう高まっているからです。日本を、今後どのような国にしていけるのかを決めるのは、私たち一人一人です。その判断に必要な情報を多角的に収集し、情報の持つ意味を的確に伝えることこそ、記者の使命だと思います。まさに、民主主義の礎としての役割です。私は、この役割の一端を担っているという感慨を持って、今後も仕事に臨んでいきたいと考えています。

東北復興支援旅行

佐久間 尚子（昭和28年卒）

今年の夏、福岡放送局に異動してから、不思議と三重県出身者と一緒に仕事をすることが増えました。出張で行った大分放送局で、カメラマンが、津高の後輩だと分かった時には、本当に驚

きました。残念ながら、九州同窓会は解散されたということですが、故郷から離れた九州の地で、再び同窓会が結成されることを願ってやみません。

四月十日五時四十分、なぎさまちに集合。少し肌寒い朝、私達同窓生十三名は、二泊三日の東北復興支援の旅に出発しました。中部空港から仙台へ。快晴の美しい富士山を見て仙台着。復

旧した空港には仙台中央タクシーのマイクバスが待っていました。このバスで三日間移動するのです。

まず石巻の日和山公園へ。テレビで何度も放映されていた所です。高台の公園に辿り着かず津波に流されて多くの人が亡くなりました。公園の下は一面に更地が広がっていました。

次は南三陸町復興商店街へ。プレハブの建物でしたが人々は元気でした。海鮮丼の店が多く、地産地消のおいしい昼食をいただきました。魚介類の店では、「今日帰るのだから売れませぬ。」と言われ、買つのを諦めました。野菜も同様でした。それでも線香乾物、水につかった布で作られたエプロン、帽子、巾着、ブローチ、葉書などを買いました。ここで災害ボランティアガイドさんと合流。地元テレビ局が取材に来ていたので、一緒に防災対策庁舎へ向かいました。避難を呼びかけていた女性が、津波にのまれた所で鉄骨だけが残っていました。



近くの神割崎でテレビスタッフと別れ、志津川地区へ。志津川病院は骨組みしか残っていませんでした。三階へ避難させた入院患者も、津波で流され、辛うじて五階へ辿り着いた人だけ助かったそうです。近くの小高い丘では、避難して来た人々が前方の海を警戒していたら、後の山へまわりこんだ水で流されたと聞きました。水の勢いは恐ろしい。この日の海は穏やかで何事もなかったかのような静けさでした。

この日はこの地区のホテルで宿泊。ウミネコが歓迎してくれていました。翌日、陸前高田市へ。道の両側の木が一定の高さで枯れていて、津波到達位置の高さを示していました。南三陸

鉄道はトンネルが残っているものの線路は流されていました。道路は凸凹、川岸は土囊が積まれたまま工事は手つかずです。骸骨のような建物と廃車や瓦礫の山が悲劇を放っていました。六万本以上あった防風林が一本だけ残っていました。有名な一本松です。

一年以上経過しても復旧は進んでいない状態に驚くと同時に憤りがこみ上げてきました。

三日目は山形を訪ねました。ここは津波や放射能の被害はないが、観光客が激減して困っているとの事でした。何ともやるせない気持ちのまま帰途につきました。

仙台から中部空港へ、なぎさまちには二十二時四十五分に着き、解散しました。

翌日買った物が宅急便で届きました。少しは経済支援に貢献できたのでしょうか。

ご注意!!

現在、津高同窓会は、名簿発刊に関わる同窓生の個人情報（氏名、住所、職業など）の提供と、名簿の購入を呼びかける行為は、一切しておりません。

くれぐれも、返信・購入予約などされませんようにご注意下さい。

返信先が、津市新町3-1-1 津高同窓会宛てとなっていないものにつきましては、ご返信なさらないように、お願いします。

◆有造塾が開催されました！

第 1 回

日時 平成23年12月23日(金・祝) 10時15分～11時45分
場所 津高等学校理科棟4階 地学室
〈演題〉「技術者冥利ゝ自動車用電子制御システムの開発に関わって」
〈講師〉大森徳郎氏
(昭和35年卒・株式会社デンソー元副社長)

第 2 回

日時 平成24年10月1日(月) 13時30分から15時
場所 津高等学校理科棟4階 地学室
〈演題〉『夢想成真』の生き方
〈CHANGEはCHANCE!〉
〈講師〉浅田剛夫氏
(昭和36年卒・井村屋グループ株式会社代表取締役社長)

第一回「有造塾」

二年 佐藤 耕治郎

大森さんのお話は私たちにとって、
今を生きる上で、またこれから生き



る上でとても重要な意味を持ったもの
になったと思いました。大森さんは私
たちに、今までの体験から自分が失
敗されたこと、会社の中で工夫された
ことだけでなく、今の私達には何が必
要であるかなども教えてくださいまし
た。

興味深いお話をたくさんしていただ
いたのですが、私の印象に一番残って
いるのは、大森さんは大事な会議やプ
レゼンの時には廊下の窓側ではなく壁
側を歩かれるということなんです。あま
りの緊張で突然発作を起こして窓から
飛び降りないよう心掛けておられた
そうです。私はこの話をお聞きして、

それくらい文字通り命を賭けてお仕
事をされていたのだなあと思いました。

家族や同僚、会社から期待され責任を
持ってお仕事をされる中で自信がつき
自分の支えとなったんだろうなあと
思いました。私は今は自分のことだけで
精一杯ですが、将来は大森さんのよう
に、会社や業界、ひいては日本を左右
するような大きな仕事を責任を持って
やりたいと思っています。

ご講演の後の質問で、私は思い切っ

第二回「有造塾」に参加して

一年 位田 華季

私は、第二回の有造塾が開かれるこ
とを知り、しかも講師が身近な『井村
屋』の社長さんだと聞いて有造塾に参
加しました。最初はすごく軽い気持ち
で参加していたのですが、お話を聞い
ているととても勉強になる、自分の将
来に役立つお話だと感じると同時に印
象に残ったことがいくつかありました。

まずは、講義の中で何度もおっしゃっ
ていた、「チャレンジする」という言
葉です。自分のしたいことをするだけ
でなく、嫌だと思つたことにもまずはチャ
レンジしてみようというお話は自分にも
身近に感じ、自分の将来も同じことが
言えるのではないかと思いました。こ
の先、私は自分の夢に向かっていろん
なことを選択していくと思います。そ
の時に、少しでも夢に関係があること
ならすぐに切り捨てようと考えて、い
ろんなことにチャレンジしていきたい

て、人生で一番大切なことは何ですか
とお伺いしました。大森さんは現状打
破とおっしゃいました。常に更なる高
みを目指す姿勢が大森さんの力の原動
力になったんだと確信しました。

デンソーという大きな会社で自動車
業界に大きな影響を与え、数々の業績
を残された大森さんのお話を有造塾で
お聞きすることができて大変刺激を
受けました。今日のお話をこれからの
人生に生かせるように頑張ります。

と思います。お話を聞いていなければ
選択を急いで可能性を捨てていたかも
しれません。ですので、「何事にもチャ
レンジする」という言葉はとても印象
的でした。

次に座右の銘である「偶然は準備の
ない者を助けない！」です。なぜなら、
案内を見たときはどういう意味なのか
全く分からなかったのですが頭のなか
に残っていたからです。講義の最後に
この言葉の意味は、偶然をただ待つて
いるだけでは偶然のチャンスが来たこ
とも分からない、偶然のチャンスをつ
かむためにはいつチャンスが来てもい
いような準備が必要だと教えていただ
きました。進路を考える、または勉強
に取り組むことにおいて、このことは
すごく大切なことだと感じました。私
もこの先、いつどんなチャンスが来て
もいよいよしっかりと準備をしたい

と思います。

そして、有造塾に参加して私の中で
一番印象に残っていることが『津高校』
という強いつながりです。有造塾は、
同窓会の皆さんと私たちが在校生が共通
のものでつながっているということをも
身にしてみても実感できる場だったと思
います。私は有造塾を通して、津高校の
良さと歴史の深さ、つながりの強さを
改めて知ることができました。

私は、津高校の生徒であることを誇
りに思うと共に自覚をしっかりと持っ
て先輩方が受け継いできた校風を守っ
ていきたいと強く思います。今回『有
造塾』に参加させていただけたことで、
私の考え方や意思は大きく変化しまし
た。また、今後このような機会があれ
ば積極的に参加していきたいと思いま
す。



津高校進路指導状況

進路指導部 上村 和弘 (昭和59年卒)

津高校は、「高い知性と教養をもったリーダー」を育成すべくキャリア教育に力を入れた進路指導を行ってまいす。大学受験の先にあるべき『志』をまず大切にしていきたいと思います。学校という小さな社会の中で、様々な個性を持ったメンバーと「濃い」活動

をすることで、生き方や在り方の基礎となる土台を大きくして卒業してほしいというのが願いです。日々の授業や体育祭などの学校行事、受験に対する取り組み等すべての教育活動をもキャリア教育の一環として位置付けており、生徒たちは自覚と目的意識をもって大

切に取り組んでいます。

本校の進路指導では、『志』のもととなる生徒自らの望ましい人生観・職業観の形成のため、生徒が主体的に体験し考える多様な機会を提供することをも一つの柱としています。同窓生の皆様にはこれらの取り組みの際に一方ならぬご尽力・ご協力をいただいております。改めてお礼申し上げます。また、生徒の幅広い進路指導の実現を保障するために、質の高い学力の構

副会長就任挨拶

田中 康一郎 (昭和57年卒)



えることができました。そうした折、ちょうど津高創立100周年を在校生として迎えたことが、漫然と過ごしていた自分に強い印象を与えました。その際、自主、自由と責任こそが先輩方の大切にしてこられた母校の誇るべき伝統であることが、それまで無自覚だった自分にもおぼろげながら感じられ、自分たちがそこに在る意味を初めて認識できたことを記憶しています。

社会に出てからは、多彩な卒業生の足跡に触れ、同窓の友に出会うたび、かけがえのない母校のつながりが続く幸せを感じたものの、さりとて母校には足を向けることもほとんどないままに過ぎてまいりました。何ともお恥ずかしい次第です。

今あらためて母校に足を踏み入れますと、そこかしこに残る昔の面影に懐かしさを覚えると同時に、装いを新たにし充実を重ねて今を歩んでいる母校の姿に誇りを感じます。なかでも、先生方と生徒のみなさんが醸し出す良識の雰囲気は、人が変わろうとも昔と変わらずそこに在ることに気づかされ、母校の伝統が脈々と息づいていることに感動すら覚えます。

そうした中で、数多くの適任者の方々を差し置いて、人生においても同窓生としても未熟な自分がお役目をお受けすることは、身の程知らずのそしりを受けることは十分覚悟の上でございますが、伝統ある津高ならびに津高同窓会の歴史に恥じぬよう、微力ながら尽力してまいりますので、どうぞよろしく指導・鞭撻のほどをお願いいたします。

(亀山製絲(株)社長)

築を目指して、学習指導の充実にも鋭意取り組んでいます。実施3年目になる入学直後の初期学習指導のみならず、今年度よりは希望者対象の土曜特別課外授業も始めました。

今春の進路状況については、国公立合格者263名。難関大合格者86名、国立医学部医学科15名、合計101名という結果を残してくれました。中でも国公立医学部医学科においては2年連続県立高校で最多の合格者を出しました。

高い『志』を持った彼らが日本や地域の中心的存在となつて活躍することを願ってやみません。現状に甘んじることなく、一人ひとりの生徒が自分の個性を大切に伸ばしていけるよう、より良い進路指導に一層取り組んでまいります。今後ともご指導よろしく申し上げます。

(大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大
(2012) H24年	237	26	762	21
(2011) H23年	186	43	668	8
(2010) H22年	221	39	764	6
(2009) H21年	210	34	557	11

	北海道	東北	筑波	お茶の水	東京	一橋
(2012) H24年	6	1	0	0	5	1
(2011) H23年	8	3	4	0	2	2
(2010) H22年	8	2	1	0	4	2
(2009) H21年	16	7	1	0	5	2

東工大	東京外大	横国大	静岡大	金沢大	信州大	名古屋大	名古屋大	名古屋大	三重大	京大	大阪府立	大阪府立	神奈川	奈良	広島	九州	慶応	早稲田	上智	青山学院	中央	東京理大	日本	明治	法政	立教	南山	名城	皇學館	龍谷	京都産業	同志社	近畿	立命館	関西	関西学院		
1	0	5	4	7	4	17	13	4	75	0	13	26	3	4	14	3	4	1	4	11	2	5	14	11	6	17	13	10	56	32	23	16	3	88	37	101	30	18
1	0	1	6	6	3	14	9	7	57	1	10	18	4	5	9	0	5	1	12	17	5	3	8	13	4	11	5	3	46	34	31	20	7	75	11	91	44	23
2	2	3	2	12	5	16	4	1	51	3	15	32	5	4	12	3	4	0	19	20	4	5	22	22	3	31	9	5	50	32	24	10	3	98	27	111	47	27
0	1	1	5	10	6	19	3	5	55	2	9	29	8	1	6	1	6	2	16	20	5	6	18	20	2	15	7	4	39	26	20	6	4	47	18	59	29	24

平成24年度総会・パーティーを終えて

実行委員会副委員長

内山 隆司 (平成3年卒)

の歌声を聴いていただきました。その豊かな声量と卓越した表現力をお楽しみいただけたのではないかと思います。パーティー終盤では次年度幹事学年の紹介が行われ、最後に恒例の校歌斉唱



八月四日(土)、「古き流れのこに合ひ 又新しき流れなす」というテーマのもと、津センターパレスホール・津都ホテルを会場に、平成24年度陳川・三重桜・津高同窓会総会・パーティーが盛大に開催されました。当日は猛暑にも関わらず七五三名の同窓生の方々にお集まりいただきました。

総会では、飯田同窓会長および榎本校長のご挨拶、そして来賓のご紹介と代議員会報告が行われました。

総会の後のパーティーでは、祝宴アトラクションとして、幹事学年である昭和54卒の谷篤さんと真路まなみさん

第4回津高同窓会学年対抗ゴルフ大会

細川 眞 (昭和42年卒)

去る四月一日(日曜日)第4回津高同窓会学年対抗ゴルフ大会が津市の伊



でクライマックスを迎え、同窓生の皆の心が一つになって、パーティーのお開きとなりました。

幹事学年として至らぬ点も多々あったかと存じますが、同窓生の皆様のご協力により、無事、総会・パーティーを終えることができました。ここに報告申し上げますとともに、皆様に御礼申し上げます。

勢中川カントリークラブで開催されました。当日は天候にも恵まれ、26年卒の大先輩から平成13年卒の幅広い年代の卒業生、二十の学年、参加総人数百六十八名の盛大な大会となりました。

プレー終了後、飯田同窓会長の挨拶をいただき表彰式が行われました。

団体戦では、我々42年卒が近藤輝矢君、中村哲久君の活躍によって見事念願の優勝を飾ることができました。

個人戦は、35年卒の中辻高明さんがグロス88、HC20・8、ネット67・2で優勝されました。

次回も二連覇をめざし日々練習を重ねていこうと思います。我々の学年、42年卒は年五回(一月は除く)奇数月に学年のコンペを開催し次回に備えています。参加を希望される方は連絡をお願いいたします。

年齢とともに飛距離が落ちていくのか、さらなる飛躍を目指していきます。

各地で同窓会開催

東京同窓会

平成24年度の東京同窓会は、五月二十六日、霞ヶ関ビルで、230名が参加して、盛大に開催されました。参加者が200名を上回るのは16年振り、若い同窓生の参加が目立つ賑やかで華やかな



団体戦
優勝 昭和42年卒 210・0
(上位3名のネットスコアの合計)
2位 昭和38年卒 215・4

3位 昭和35年卒 215・4
(2位、3位は第4位の成績による)
(来年度以降もこの大会が開催されることを願っております。)

会となりました。

例年同様、谷口会長並びに来賓各位が挨拶されたほか、岡山大学教授の榎田正治様(昭和40年卒)が「環境にやさしいトマトやメロンの栽培方法」と題する講演を行いました。幹事による「古き流れのこに合ひ 又新しき流れなす」と題する津高の歴史を綴ったスライドショーも行われました。

会の途中における席替えは、例年のように居住地区別でなく、出身中学・地区別に行われ、同じ中学の先輩・後輩が共通の話題で盛り上がりつつありました。

最後に、陳川・三重桜・津高の校歌を斉唱し、来年も盛大な会にしたいという次回幹事の挨拶の後、散会しました。

(昭和40年卒・輪番幹事)

名古屋同窓会

本年度名古屋同窓会は、九月八日、名古屋東急ホテルにて開催されました。百四十名の先輩後輩が集い、昨年と同様にぎやかな会となりました。

総会に先立って、愛知県立芸術大学教授の北住淳様(昭和53年卒)による



(田中千裕・平成20年卒)

講演及びピアノ演奏会が行われました。素敵な演奏に聞き入ってしまい優雅な時を過ごすことができました。

その後総会、懇親会が行われ、毎年恒例の津高クイズで盛り上がりました。今年の校歌合唱は、北住淳教授の生伴奏で行われたため、昨年にも増して会場が一つになりました。

毎年、元気でパワフルな先輩方にお会いするところらまで活気に満ちあふれます。しかしその中で平成卒の参加者が少ないという声もあります。東京や大阪同窓会では現役の大学生の参加もあるようです。名古屋同窓会にもぜひ平成卒の仲間が増えたらと思います。

物 故 者

謹んでご冥福をお祈りいたします。

(平成24年10月15日現在) (敬称略)

旧職(8) 野 田 彦四郎	昭22 西 井 季 男	昭19 前島(垣野)宣子	昭31 高 橋 伸 知
旧職 森 田 丈 三	昭22 藤 田 百 助	昭20 信藤(野崎)洋子	昭32 藤 村 知 弘
旧職(20④)三 鬼 重 宣	昭22 別 所 業 啓	昭20④岡島(森田)美知	昭33 池 田 稔
旧職(22) 長谷川 寛	昭23 後 藤 和 章	昭20④尾山(小津)米子	昭33 近 藤 忠 義
旧職(38) 印 田 恭 子	昭23 洲 崎 和 夫	昭20④小 林 照 代	昭33 清水(葛山)津子
旧職 村 上 茂	昭23 田 中 武	昭20④荘司(久保)たづ子	昭33 横 井 勉
陳川大11 木 原 一 藏	昭24 平 子 博 司	昭20④谷口(浦和)典子	昭35 川 合 清 隆
昭 7 鈴 木 幸 平	昭20入長 崎 未知生	昭20④丸山(坂野)静子	昭35 松 井 亮 一
昭 9 池 山 定 利	三重桜大15 谷口(谷口)重子	昭22 堀尾(堀尾)律子	昭36 大 川 隆
昭 9 高 山 成 雄	大15 仲田(川喜田)秋子	昭22 森(田中)五百枝	昭36 斎 藤 朝 子
昭10 名 和 一 帆	昭 5 磯部(田中)正子	昭23 永田(中村)千津	昭37 朝 倉 八 郎
昭10 松 本 準 三	昭 5 大橋(鈴木)和枝	昭23 林 (中村) 良江	昭37 市 川 隆 司
昭11 角 谷 隆 郎	昭 6 荒 川 サ ヲ	昭23 水野(岡本)一子	昭37 内 田 雅 教
昭12 若 林 利 重	昭 7 西岡(山本)志あ子	津高昭24 今 中 愛 子	昭37 小野寺 忠 一
昭13 稲 葉 穰	昭 8 大久保(谷口)喜代	昭24 堀 (井川) 佳子	昭37 北 角 洋
昭13 鈴 木 文 人	昭 8 佐藤(宮崎)与志子	昭25 青 木 利 之	昭37 斎藤(小菅)輝彦
昭13 野 田 梧 郎	昭 8 藤堂(田中)合子	昭25 内 田 哲 雄	昭37 田 上 征 夫
昭14 神 戸 尚	昭 8 和田(細川)たか	昭25 岡 正 基	昭37 富 増 泰 正
昭14 坂 口 巖	昭10 渥美(堤)孝子	昭26 真川(刀根)節子	昭37 中村(近沢)和子
昭14 針 谷 巖	昭10 橋本(石谷)しづ	昭26 前田(川井) 博	昭39 美 宅 篤 良
昭14 山 本 孝 圓	昭11 伊 藤 田 鶴子	昭26 山 田 秀 夫	昭40 鈴 木 成 幸
昭15 坂 本 栄 蔵	昭12 黒井(川合)と志	昭27 落 合 芳 樹	昭40 鷺見(大森)町子
昭15 丹 羽 交 一	昭13 田島(大村)とし	昭27 下 川 徹	昭40 滝 俊 二
昭16 伊 藤 昌 英	昭14 杉山(富田)伊都子	昭27 瀬 古 丞	昭40 山田(丸山)淳子
昭16 村 田 恒 男	昭14 長尾(水谷)貞子	昭27 谷 内 洋一郎	昭42 伊 藤 準 一
昭17 森 幸 夫	昭16 川原(荻原)由子	昭27 丹 羽 ふ み	昭42 奥 山 洋 司
昭19 奥 村 千 蔵	昭16 藤 田 香 都	昭27 林 貢	昭42 木 村 幸 司
昭19 中 道 恂	昭17 大西(川北)萬亀	昭28 岡 本 守 弘	昭42 木 村 文 人
昭20 蓼 沼 美 夫	昭17 公 文 佐 紀	昭29 秋 山 輔	昭42 田 上 吉 人
昭20④阪 淳	昭17 辻 (徳屋) 美子	昭29 伊藤(村瀬)恵子	昭42 橋 本 雅 幸
昭21 鏡 定 雄	昭19 岡田(西村)節子	昭29 瀬戸(広山)雅子	昭43 小 西 美知雄
昭22 後 藤 義 明	昭19 新 堂 石 野	昭29 村鳥(倉田)恵子	昭45 伊 藤 龍 生
昭22 鈴 木 茂 也	昭19 杉野(加藤)照子	昭30 林 雄 三	昭50 山 口 仁 平
		昭30 山 口 誠 郎	昭52 伊勢野 賢 二
		昭31 伊 藤 聰	昭55 桜 井 昌 二
		昭31 角 谷 宗 平	昭58 佐 脇 章 二
		昭31 小 澤 良 哉	昭61 青柳(栗本)亮子

お知らせ

平成二十五年度 同窓パーティー

日時 平成二十五年八月三日(土)

午後三時より

場所 津センターパレスホール五階

津都ホテル

テーマ「讃えんかなや我が津高」

～すべての同窓生にエールを送る～

担当学年幹事

昭和55年卒(代表 川原林義弘)
平成4年卒(代表 野田 直裕)

平成25年度同窓会

実行委員長 川原林 義弘(昭和55年卒)

平成25年度の同窓パーティーは、昭和55年卒と平成4年卒が担当させていただきます。去る九月七日に平成24年度幹事学年の方々と、丁寧な引継ぎをいただき、歴代の幹事の皆さまのご奮闘に心から敬意を払いますとともに改めてその責任の重さに身の引き締まる思いがしております。

副幹事学年として参加した平成13年

度同窓パーティーの準備・運営では、

昭和43年卒の先輩方との素晴らしい出

会にご参加いただいた多くの方々と

の交流を通じて、津高同窓会の伝統や

偉大さを再度認識し、母校への想いを

一層強くいたしました。まさに「讃え

んかなや我が津高」の境地です。その

想いを副幹事学年の後輩たちと共有しながら、幹事一同、一生懸命準備を進めてまいります。

昨今、政治・経済・外交問題など明るい話題が少ない世の中ですが、同窓会のひとつときは、青春の希望に満ち溢れていたあの頃に帰り、陳川・三重桜・津高卒業生の誇りを再び感じて、明日への力に変えていただければ幸いです。

旧友との懐かしい語らいや学年を超えた新しい出会いを通して、同窓生の絆をより一層強め、母校への想いをさらに深くしていただけるような温かく元気な同窓会にしたいと考えています。

たくさんの方々の皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

参加者募集

★第五回 学年対抗ゴルフ大会

学年対抗ゴルフ大会を開催します。

ふるってご参加ください。

日程 平成二十五年

三月二十四日(日)

場所 伊勢中川カントリークラブ

(津市二志町井生)

参加費 一、五〇〇円

(プレー費・昼食・コース売店・

パーティー代・会費含む)

キャディは別途 三、一五〇円

定員 百六十名(定員になり次第、切)

※厳守 各学年三名以上十六名以内

※練習ラウンドの設定あり

※お問い合わせ・お申し込み先

津高同窓会事務局

TEL 059-229-7331

★バリとボロブドゥール

(インドネシア・世界遺産)の旅

津高同窓会では、来年四月中旬に、海外旅行を予定しております。

インドネシアのバリと、千年の時を

超えた世界最大級の仏教遺跡、ボロブ

ドゥールを中心に観光。癒しのホテル

アマンジョに滞在し、ゆったりとした

時を楽しみたいと考えています。同窓

会の旅行は、ちょっと……とためらっ

てみるみなさん、是非一度参加して

みてください。楽しかった、また次も

と思っていただける旅にしたいと、現

在鋭意企画中です。参加ご希望の方、

興味のおありの方は、事務局までご連

絡ください。

TEL 059-229-7331

学年同窓会

★昭和38年卒学年同窓会

『卒業して50年』を記念して

日時 平成25年4月21日(日)15時

場所 津都ホテル

詳細は後日、郵送にてご案内いたします。ご予約ください。

★昭和56年卒学年同窓会

日時 平成25年1月2日(水)

場所 プラザ洞津

★平成4年卒学年同窓会

日時 平成25年1月3日(木)

受付15時 開宴15時30分

場所 津都ホテル5F 伊勢の間

会費 七千円

※平成25年度8月の総会・パーティー

の幹事担当学年となる事に先駆けて

学年同窓会を開催致します。多数の

ご参加をお待ちしております。

事務局だより

○会報五十号を二万五千部余発行いたしました。

○住所異動の際は、卒年・名前・新住所をお書きの上、必ず事務局までお知らせ下さい。葉書・FAX・メールにて受け付けております。

○事務局開局日、月・火・水・金曜日 午前九時十五分～午後四時十五分 お気軽にお立ち寄りください。

○ホームページは、日々更新しております。最新情報は、是非ホームページをご覧ください。

○会報は、ホームページにも掲載しています。今後、会報は、ホームページでご覧になっていたが送付不要にご協力いただける方はメールにてご連絡ください。

○昭和36年卒の谷岡経津子さんから、第28回(1996年)日展入選作「アカプルコの咲く室内」100号を寄贈いただき、学校の図書館前に飾られました。

津高同窓会のホームページ

http://tsuko.jp/

メールアドレス

office@tsuko.jp

TEL・FAX 059-229-7331